

2019 年度

国 語  
(2期)

(答はすべて解答用紙に記入すること)

(時 間 45分)

番 号		氏 名	
--------	--	--------	--

〔一〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

唐突<sup>とうとつ</sup>ですが、今日は、今、みなさんが手にしているこの『暮<sup>て</sup>しの手帖』を使って、2つの質問をするとところから始めたいと思います。

【質問1】この『暮<sup>て</sup>しの手帖』は、1キログラムより重いか？ 軽いかな？

【質問2】では、この『暮<sup>て</sup>しの手帖』の重さは、何グラムぐらいでしょうか？

この先は、ご自分なりの答えを出してから読み進めてください。もし面倒くさくなければ、手近な紙に答えを書いておきましょう。

では、答え合わせをします。よろしいでしょうか。まず、質問1ですが、正解は『軽い』です。私のまわりで試したところ、20人中19人が正解を出しました。類推するに、みなさんもほとんどの方が正しく答えたのではないのでしょうか。1キログラムという重さは、今までの人生において何となく身<sup>①</sup>に覚えのある重さだと思われるので、なんとか答えが出るようです。それはそうと、実は、今回の本題は、質問1の答えを当てることではありませんので、先に進ませていただきます。

さて、質問2の方ですが、みなさんの答えの多くは、恐らく500グラム台から800グラム台となっているのではないかと推測します。いかがでしょうか。実際、性別も年齢<sup>ねんれい</sup>もばらばらな20名の方々に同じ質問に答えていただいた結果、500グラム台4名、600グラム台2名、700グラム台6名、800グラム台以上5名、300グラム台以下3名、といった結果が得られました。つまり、500グラム以上が\*%を占めたのでした。

実は、みなさんが回答する前に正解の数字がうっかり目に入らないよう、答えは文末に載<sup>の</sup>せておきました。見てみてください。少々、驚<sup>おどろ</sup>かれた方も多かったかもしれませんが、なんと400グラム台の数字だったのです。もちろん、この答えに近かった方もいらっしゃるかもしれませんが、ほとんどの方は、この答えより大きな数字を挙げたと推測します。

余談ですが、私が行ったアンケートでは、500グラム台を書いた4名中の3名は、主婦の方でした。普段<sup>ふだ</sup>買うお肉の重さと比較したということでした。話を戻<sup>もど</sup>しましょう。

③なぜ、ほとんどの方が正解より大きな数字を挙げたのか考えてみてください。そうですね、お分かりになりましたね。【質問1】の1キログラムという数字に引<sup>ひ</sup>つぱられてしまったからです。わざわざ1キログラムという数字を挙げたからには、それを基準に重いか、軽いかを問題にしていると、無意識に思われたのではないのでしょうか。

このように始めに、目安とおぼしき情報を示すことで、判断に影響を与えることを心理学では、「アンカリング効果」と呼んでいます。anchor とは錨のことです。錨を下ろすと、答えはその辺りに留まることから「係留効果」とも呼ばれます。

先日、私が勤務している大学院で新入生約60名を対象にオリエンテーションがあった。馬車道校舎という石造りの校舎の1階ホールで行われた。先日、私が勤務している大学院で新入生約60名を対象にオリエンテーションがあった。馬車道校舎という石造りの校舎の1階ホールで行われた。(注1)

(1) その後、私が所属している専攻は校舎を移動して、今学期のカリキュラム説明会を開くことになっていた。対象は12名に絞られる。私達の大学院は横浜市街にあり、その校舎は点在している。(2)、移動はキャンパス内ではなく、街の中の移動になる。

オリエンテーションの後、助手達が新入生12名を引率して、電車で次の「元町中華街校舎」に向かおうとした時のことである。先生達も新校舎に急いでください。みんなが揃い次第、講義室でカリキュラム説明会を始めます」

新入生が入り乱れるホールで、そんな声を投げかけられた。実は、元町中華街校舎は、この4月から使われている新校舎である。私も春休みに引越しの作業で行っただけで、まだ1回しか行ったことがない。

「佐藤先生は、どうやって行かれますか。他の先生達は車で行くって言ってますけど」

一人の助手が尋ねた。

「僕は歩いて行きたいんだけど、だめかな？」と答えた。横浜の街並みを見ながらの歩きは、この季節、惹かれるものがあった。

「30分はかかると思いますが、電車で走っても、なんだかんだで20分はかかる位ですから」

「(3)、二駅だよね」

「遅れないで来てくださいよ」

それから私は事務室に寄り、いろんな書類を提出してから、徐に出発した。腕時計を見たら、4時5分であった。

横浜の街は快適であった。木々の緑が風にそよぎ、開港記念会館といった歴史的な建物も次から次へと現れるのだが、決してこれ見よがしではなく、街全体が醸し出すひとつのトーンの中にしっくりと収まっていた。(注4)

元町や中華街は、観光や会食では何度か来ているが、校舎間の移動という日常の中にそれが組み込まれた喜びのようなものを感じて、私は歩いた。するとまもなく中華街の入口の1つである青色の朝陽門が急に目の前

に現れた。その行く手には、さらにもう1つの朱色の門が見えるではないか。春休みに来た時に新校舎の近くに朱雀門という朱色の門があったのを思い出した。時計を見ると、4時20分にもなっていない。近づくと果たしてそれは朱雀門であった。ここからなら1、2分で新校舎まで着くはずだと、初めての道中が無事終わることに安堵の気持ちが起こった。新校舎に着くと、先に出発していた新入生達がちょうど1階でエレベーターを待っていた。さつき、30分はかかりますよと言った助手達は妙な顔をした。

「実際に歩くと、20分位だよ。今日は初めてだから分かりやすい大通り沿いに来たけど、直線で来れば、もっと早いと思うよ」と私はちよつと得意気に応えた。

しかし、そう言った自分も所要時間の短さに内心驚いていた。私は特に急がなかった。むしろ、風景を楽しみつつ歩いたし、その風景のおかげで信号待ちさえも快適であった。だが、20分の歩きというのは、通常で考えれば、決して楽なものではない。私の事務所のある築地から頑張って有楽町まで歩くことが時々あるが、その時間が20分である。その時は意を決してスタートする感じである。しかし、今回の校舎間の移動は短かった。

さて、ここで、この文章の最初の体験に戻ろう。みなさんは、この『暮しの手帖』の重さを体感で量った。その時、多分、多くの方は、50グラム台から80グラム台の数字を思った。でも、実際は40グラム台の数字であった。なぜ、こんな一様に偏った誤差が生まれたのか。それはみなさん<sup>⑦</sup>も、もうご存じのアンカリング効果である。最初に与えられた1キログラムという数字に引っぱられ、みなさんの感覚に、ある一種の歪みが生じたのである。

元町中華街校舎に向かった私は、助手達から30分かかるといふ情報を予め与えられたために、普段なら辟易となる20分の歩きを短いと感じたのである。ここにもアンカリング効果が生まれていたのであった。

このアンカリング効果は、私達の身近なところによく出現するので、要注意である。例えば、2000円の商品を何も情報をつけないで売る場合と、通常2800円のところをセールで2000円です、と言われた場合とでは、後者の方が買ってしまいやすくなる。

例えば、何かの納期を伝えるのに、3日ですと伝えると、4日かかった時に1日遅れたと思われるが、最初から5日と伝えておくと、1日早く納品してくれたと思われるのである。これらも最初の情報、つまり錨をどこに打つかということに依っている。

(付録込みで約490グラム)

『暮しの手帖』所収コラム・佐藤雅彦著「考えの整頓」より一部改変)

- (注1) オリエンテーション：新入生に対して行われる説明会。
- (注2) 専攻…ある分野を専門的に研究すること。また、そのコース。
- (注3) 徐おもむに…ゆつくりと。静かに。
- (注4) トーン…色合い。
- (注5) 安堵あんど…心配のないこと。ほっとすること。
- (注6) 辟易へきえき…うんざりすること。

問一 ――線①「身に覚えのある」は慣用句として、「自分のしたこと心あたりがある」という意味です。本文中での「身」は、どのような意味で用いられていますか。次の中からもっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 命    イ 環境    ウ 文化    エ 印象    オ 感覚

問二 ――線②「つまり、500グラム以上が  %を占めたのでした」の  に入るのは、どの数字ですか。次の中から正しいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 55    イ 65    ウ 75    エ 85    オ 95

問三 ――線③「なぜ、ほとんどのの方が正解より大きな数字を挙げたのか」について、次の問いに答えなさい。

(1) その原因となるものは何ですか。これより後の本文から七字以上十字以内でぬき出し、答えなさい。

(2) (1) についてくわしく説明した部分はどこですか。本文からぬき出し、始めと終わりの五字を答えなさい。

問四 (1) (3) には、どのような言葉が入りますか。次の中からふさわしいものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア でも    イ ところで    ウ さらに    エ なぜなら    オ そのため

問五 ――線④「どうやって行かれますか」とありますが、この「れ」と同じ意味で使われているものはどれですか。もっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア おなかがいっぱいでもう食べられない。

イ 昔のことがこのごろしきりに思い出される。

ウ 春のおとずれが感じられる。

エ となりのおじさんが海外から帰国された。

オ 新たに賞が設けられた。

問六——線⑤「それが組み込まれた喜びのようなものを感じて」とありますが、筆者はどのような「喜び」を感じていますか。説明しなさい。

問七——線⑥「助手達は妙な顔をした」とありますが、助手達はなぜ「妙な顔」をしたのですか。その理由としてもっともふさわしいものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 歩いて30分はかかるといふまことがあったことを言ってしまったのに、先生が新校舎に予定通り着いたのを見て、申し訳なく感じたから。  
イ 事務室に寄り、先生は書類を提出してから出発したにちがいがなく、そもそも老人の足どりなのでかなりゆっくり来ると予想していたから。

ウ 電車で移動しても20分はかかる上に、先生が散歩しながらやって来ると言っていたので、集合時間に間に合わないだろうと想像していたから。

エ 歴史的な建造物が次々と現れる街歩きは、寄り道をせずにはいられないだろうから、そうとう疲れて到着するだろうと見越していたから。

オ 自分たちが新校舎に着いたのは、きっと先生よりかなり早かったに違いないだろうと予想していたのに、ほとんど同じ時間に到着したから。

問八——線⑦「最初に与えられた1キログラムという数字に引っぱられ、みなさんの感覚に、ある一種の歪みが生じたのである」とありますが、「横浜の街」の例では筆者にどのような感覚の歪みが生じたのですか。その理由もふくめて、本文中の言葉を使って説明しなさい。

問九 本文の内容に関連する次の①の文章・②のマンガを読んで、後の問いに答えなさい。

① 中国の宋の国に狙公と呼ばれる男がいた。狙公は猿をたいへんかわいがり、飼っていた。猿は多くて群れをなしていた。狙公は猿の気持ちを理解することができ、猿もまた、狙公の気持ちがあつた。狙公は自分の家族の食べ物を減らしてまで、猿にえさを与えていた。

ところが、しばらくして食べ物が少なくなつてしまった。そこで狙公は猿のえさを減らそうとした。まず猿たちに次のように言った。「お前たちにごんぐりの実をやるのに、朝は三つで夕方は四つにしようと思う。足りるか。」と。これを聞いた猿たちは皆立ち上がつて怒つた。猿たちの様子を見た狙公は次にこう言った。「それでは、お前たちにごんぐりの実をやるのに、朝は四つで夕方は三つにしようと思う。それで足りるか。」と。すると猿たちは皆大喜びをした。

(1) この話が元になつて生まれた四字熟語は何ですか。答えなさい。

(2) (1) で答えた四字熟語の意味としてふさわしいものを、次の中から二つを選び、記号で答えなさい。

ア 即座にその場になつた機転をきかせること。

イ うわべだけ飾つた、内容のないこと。

ウ 表面的な違いにとらわれ、結果が同じであることに気づかないこと。

エ 小さな違いはあつても、大体が同じであること。

オ あやふやで、はっきりとしないこと。

カ 言葉巧みに人をだますこと。

(3) この文章の内容として、もっともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

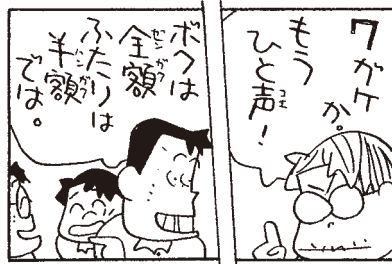
ア 「狙公が家族の食べ物を減らした」という事実に引っぱられて、自分たちにえさを与えてくれることを猿たちは喜んでいる。

イ 「朝に三つ」という数字に引っぱられて、夕方に朝よりも多くのごんぐりの実をもらえることを猿たちは喜んでいる。





7409



山田くん

ウ 「夕方に四つ」という数字に引っぱられて、夕方に朝よりも多くのどんぐりの実をもらえることを猿たちは喜んでる。  
 エ 「夕方に四つ」という最初の提案の数に引っぱられて、最初よりも多くのどんぐりの実をもらえることを猿たちは喜んでる。  
 オ 「朝に三つ」という最初の提案の数に引っぱられて、もらえる総数は変わらないにもかかわらず、猿たちは喜んでる。

(注) 7ガケ：70%のこと。

(朝日新聞 平成三十年五月二十五日朝刊掲載)

(4) なぜ山田くんのお母さんは家庭教師の先生を「頼りない」と言ったのですか。その理由を説明しなさい。

〔二〕 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限のあるものについては、すべて句読点や記号をふくみます。)

ある春の午過ぎです。白という犬は土を嗅ぎ嗅ぎ、静かな往来を歩いています。狭い往来の両側にはずつと芽をふいた生垣が続き、そのまた生垣の間にはちらほら桜なども咲いています。白は生垣に沿いながら、ふとある横町へ曲がりました。が、そちらへ曲がったと思うと、さもびつくりしたように、突然立ち止まってしまいました。

それも無理はありません。その横町の先には印半纏を着た犬殺しが一人、罾をうしろに隠したまま、一匹の黒犬を狙っているのです。しかも黒犬は何も知らずに、犬殺しの投げてくれたパンか何かを食べているのです。けれども白が驚いたのはそのせいばかりではありません。見知らぬ犬ならばともかくも、今犬殺しに狙われているのはお隣の飼う犬の黒なのです。毎朝顔を合せる度にお互いの鼻の匂いを嗅ぎ合う、大の仲よしの黒なのです。

白は思わず大声に「黒君！ あぶない！」と叫ぼうとしました。が、その拍子に犬殺しはじろりと白へ目をやりました。「教えて見ろ！ 貴様から先へ罾にかけろぞ。」——犬殺しの目にはありありとそういう嚇しが入っています。白はあまりの恐ろしさに、思わず吠えるのを忘れまいや、忘れたばかりではありません。一刻もじつとしてはいられぬほど、臆病病が立ち出したのです。白は犬殺しに目を配りながら、じりじりとずさを始めました。そうして可哀そうな黒を残したまま、一目散に逃げ出しました。

その途端に罾が飛んだのでしよう。続けざまにけたたましい黒の鳴き声が聞えました。しかし白は引き返すどころか、足を止めるけしきもありません。ぬかるみを飛び越え、石ころを蹴散らし、ゴミための箱を引っくり返し、振り向きもせず逃げ続けました。御覧なさい。坂を駆けおりののを！ そら、自動車に轢かれそうになりました！ 白はもう命の助かりたさに夢中になっているのかも知れません。いや、白の耳の底にはいまだに黒の鳴き声が蛇のように唸っているのです。

「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！ きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

白はやつと喘ぎ喘ぎ、主人の家へ帰って来ました。白はほとんど風のように、裏庭の芝生へ駆けこみました。もうここまで逃げて来れば、罾にかかる心配はありません。おまけに青々とした芝生には、幸いお嬢さんや坊ちゃんもボール投げをして遊んでいます。それを見た白の嬉しさは何と云えばいいのでしょうか？ 白はしつぽを振りながら、一足飛びにそこへ飛んで行きました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ 今日はお嬢さんに遭いましたよ。」

白は二人を見上げると、息もつかずにこう言いました。（もつともお嬢さんや坊ちゃんには犬の言葉はわかりませんから、わんわんと聞こえるだけなのです。）しかし今日はどうしたのか、お嬢さんも坊ちゃんもただ呆氣にとられたように、頭さえなでてはくれません。白は不思議に思いながら、もう一度二人に話しかけました。

「お嬢さん！ あなたは犬殺しを御存じですか？ それは恐ろしいやつですよ。坊ちゃん！ わたしは助かりましたが、お隣の黒君はつかまりませんでした。」

それでもお嬢さんや坊ちゃんは顔を見合せているばかりです。おまけに二人はしばらくすると、こんな妙なことさえ言い出すのです。

「どこの犬でしょう？ 春夫さん。」

「どこの犬だろう？ 姉さん。」

どこの犬？ 今度は白の方が呆氣にとられました。（白にはお嬢さんや坊ちゃんの言葉もちゃんと聞きわけることが出来るのです。我々は犬の言葉がわからないのですから、犬もやはり我々の言葉はわからないように考えていますが、実際はそうではありません。）

「どこの犬とはどうしたのです？ わたしですよ！ 白ですよ！」

けれどもお嬢さんは相変わらず気味悪そうに白を眺めています。

「お隣の黒の兄弟かしら？」

「黒の兄弟かも知れないね。」坊ちゃんもバットをおもちやしなから、考え深そうに答えました。

「こいつも体中まっ黒だから。」

④ 白は急に背中毛が逆立つように感じました。まっ黒！ そんなはずはありません。白はまだ子犬の時から、牛乳のように白かったのですから。しかし今前足を見ると、いや、——前足ばかりではありません。胸も、腹も、後足も、すらりと上品にのびたしつぽも、みんな鍋底のようにまっ黒なのです。まっ黒！ まっ黒！ 白は気でも違ったように、飛び上ったり、跳ね回ったりしながら、一生懸命に吠え立てました。

「あら、どうしましょう？ 春夫さん。この犬はきつと狂犬だわよ。」

お嬢さんはそこに立ちすくんだなり、今にも泣きそうな声を出しました。しかし坊ちゃんは勇敢です。白はたちまち左の肩をばかりとバットに

打たれました。と思うと二度目のバットも頭の上へ飛んで来ます。白はその下をくぐるが早いか、もと来た方へ逃げ出しました。

「お嬢さん！ 坊ちゃん！ わたしはあの白なのですよ。いくら真っ黒になっても、やっぱりあの白なのですよ。」

白はとうとうしつぽを巻き、黒堀の外へぬけ出しました。

「ああ、今日から宿無し犬になるのか？」

白はため息を洩らしたまま、しばらくはただ電柱の下にぼんやり空を眺めていました。

お嬢さんや坊ちゃんに追い出された白は東京中をうろろう歩きまわりました。しかしどこへどうしても、忘れることの出来ないのは真っ黒になった姿の事です。白は客の顔を映している理髪店の鏡を恐れました。雨上りの空を映している往來の水たまりを恐れました。往來の若葉を映している飾り窓の硝子を恐れました。いや、カフェのテーブルに黒ビールを湛えているコップさえ、——けれどもそれが何になりました？ あの自動車を御覧なさい。ええ、あの公園の外にとまった、大きい黒塗りの自動車です。自動車の車体は今こちらへ歩いて来る白の姿を映しました。——はつきりと、鏡のように。白の姿を映すものはあの客待ちの自動車のように、いたるところにあるわけなのです。もしあれを見たとすれば、どんなに白は恐れるでしょう。それ、白の顔を御覧なさい。白は苦しそうに唸ったと思うと、たちまち公園の中へ駆けこみました。

公園の中にはずかけの若葉にかすかな風が渡っています。白は頭を垂れたなり、木々の間を歩いて行きました。ここには幸い池のほかには、姿を映すものも見当りません。物音はただ白薔薇に群がる蜂の声が聞えるばかりです。白は平和な公園の空気に、しばらくは醜い黒犬になった日ごろの悲しさも忘れていました。

しかしそういう幸福さえ五分と続いたかどうかわかりません。白はただ夢のように、ベンチの並んでいる路ばたへ出ました。するとその路の曲がり角の向こうにけたたましい犬の声が起こったのです。

「きゃん。きゃん。助けてくれえ！ きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」

白は思わず身震いをしました。この声は白の心の中へ、あの恐ろしい黒の最後をもう一度はつきり浮ばせたのです。白は目をつぶったまま、もと来た方へ逃げ出そうとしました。けれどもそれは言葉通り、ほんの一瞬の間のことです。白は凄惨な唸り声を洩らすと、きりりとまた振り返りました。

「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！ きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」<sup>⑥</sup>

この声はまた白の耳にはこういう言葉にも聞えるのです。

「きゃあん。きゃあん。臆病ものになるな！ きゃあん。臆病ものになるな！」<sup>⑦</sup>

白は頭を低めるが早い、声のする方へ駆け出しました。

犬殺しだと思つて白がかけつけると、茶色の子犬が二、三人の子どもに首に縄を付けられていました。彼らはその子犬をなぐつていじめていました。怒つた白が子どもたちに吠えたことで、彼らは逃げていきました。

「さあ、おれと一しよに来い。お前の家まで送つてやるから。」

白はもと来た木々の間へ、まっしぐらにまた駆けこみました。茶色の子犬も嬉しそうに、ベンチをくぐり、薔薇を蹴散らし、白に負けまいと走つて来ます。まだ首にぶら下つた、長い縄をひきずりながら。

二三時間たつた後、白は貧しいカフェの前に茶色の子犬と佇んでいました。昼も薄暗いカフェの中にはもう赤あかと電燈がともし、音のかすれた蓄音機は浪花節か何かやっているようです。子犬は得意そうに尾を振りながら、こう白へ話しかけました。

「僕はここに住んでいるのです。この大正軒というカフェの中に。——おじさんはどこに住んでいるのです？」

「おじさんかい？——おじさんはずっと遠い町にいる。」

白は寂しそうにため息をしました。

「じゃもうおじさんは家へ帰ろう。」

「まあお待ちなさい。おじさんの御主人はやかましいのですか？」

「御主人？ なぜまたそんなことを尋ねるのだい？」

「もし御主人がやかましくなければ、今夜はここに泊つて行って下さい。それから僕のお母さんにも命拾いの御礼を言わせて下さい。僕の家には

牛乳だの、カレーライスだの、ビフテキだの、いろいろな御馳走ごちそうがあるのです。」

「ありがとう。ありがとう。だがおじさんは用があるから、御馳走になるのはこの次にしよう。——じゃお前のお母さんによろしく。」

白はちよいと空を見てから、静かに敷石しきいしの上を歩き出しました。空にはカフェの屋根のはずれに、三日月もそろそろ光り出しています。

「おじさん。おじさん。おじさんと言えば！」

子犬は悲しそうに鼻を鳴らしました。

「じゃ名前だけ聞かして下さい。僕の名前はナポレオンと言うのです。ナポちゃんだのナポ公だのとも言われますけれども。——おじさんの名前は何と言うのです？」

「おじさんの名前は白と言うのだよ。」

「白——ですか？ 白と言うのは不思議ですね。おじさんはどこも黒いじゃありませんか？」

⑧ 白は胸がぱいになりました。

「それでも白と言うのだよ。」

「じゃ白のおじさんと言いましよう。白のおじさん。ぜひまた近いうちに一度来て下さい。」

「じゃナポ公、さよなら！」

「ごきげんよう、白のおじさん！ さようなら、さようなら！」

その後、白は危機におちいった命を救う、正体不明の黒い犬として、様々な新聞に何度も取り上げられました。しかし、その黒い犬は、人を助けるとすぐどこかに消えてしまうため、一体どんな犬なのか、みな分かりませんでした。

ある秋の真夜中です。体も心も疲れ切った白は主人の家へ帰って来ました。もちろんお嬢さんや坊ちゃんはどうに床とこへ入っています。いや、今は誰だれ一人起きているものもありますまい。ひっそりした裏庭の芝生の上にも、ただ高いしゅろの木きの梢すゑに白い月が一輪浮んでいるだけです。白は昔の犬小屋の前に、露つゆに濡ぬれた体を休めました。それから寂しい月を相手に、こういうひとりごとを始めました。

「お月様！ お月様！ わたしは黒君を見殺しにしました。わたしの体のまっ黒になったのも、大かたそのせいかと思っています。しかしわたしはお嬢さんや坊ちゃんにお別れ申してから、あらゆる危険と闘って来ました。それは一つには何かの拍子に煤すすよりも黒い体を見ると、臆病を恥はじる気が起こったからです。けれどもしまいには黒いのがいやさに、——この黒いわたしを殺したさに、あるいは火の中へ飛びこんだり、あるいはまた狼おおかみと闘ったりしました。が、不思議にもわたしの命はどんな強敵にも奪うばわれません。死もわたしの顔を見ると、どこかへ逃げ去ってしまうのです。わたしはとうとう苦しさの余り、自殺しようと決心しました。ただ自殺をするにつけても、ただひと目会いたいのは可愛かわがってくださった御主人です。もちろんお嬢さんや坊ちゃんはあしたにもわたしの姿を見ると、きつとまた野良犬のらぬいと思うでしょう。ことによれば坊ちゃんのバツトに打ち殺されてしまうかも知れません。しかしそれでも本望ほんもちうです。お月様！ お月様！ わたしは御主人の顔を見るほかに、何も願うことはありません。そのため今夜ははるばるともう一度ここへ帰って来ました。どうか夜の明け次第しだい、お嬢さんや坊ちゃんに会わせて下さい。」

白はひとりごとを言い終わると、芝生にあごをさしのべたなり、いつかぐつすり寝入ねいってしまいました。

「驚いたわねえ、春夫さん。」

「どうしたんだらう？ 姉さん。」

白は小さい主人の声に、はつきりと目を開きました。見ればお嬢さんや坊ちゃんは犬小屋の前に佇たんだまま、不思議そうに顔を見合せています。白は一度挙げた目をまた芝生の上へ伏ふせてしまいました。お嬢さんや坊ちゃんは白がまっ黒に変わった時にも、やはり今のように驚いたものです。あの時の悲しさを考えると、——白は今では帰って来たことを後悔こうかいする気さえ起こりました。するとその途端とたんです。坊ちゃんは突然飛び上ると、大声にこう叫びました。

「お父さん！ お母さん！ 白がまた帰って来ましたよ！」

白が！ 白は思わず飛び起きました。すると逃げるとでも思ったのでしょうか。お嬢さんは両手をのびしながら、しっかり白の首を押しおえました。同時に白はお嬢さんの目へ、じつと彼の目を移しました。お嬢さんの目には黒い瞳ひとみにありありと犬小屋が映っています。高いしゅろの木のかげになったクリーム色の犬小屋が、——そんなことは当然に違いありません。しかしその犬小屋の前には米粒ほどの小ささに、白い犬が一匹すわ坐すわっているのです。明らかに、ほっそりと。——<sup>⑨</sup>白はただ恍惚こうこうとこの犬の姿に見入りました。

「あら、白は泣いているわよ。」

お嬢さんは白を抱きしめたまま、坊ちゃんの顔を見上げました。坊ちゃんは——御覧なさい、坊ちゃんの威張っているのを！  
「へっ、姉さんだって泣いている癖に！」

（芥川龍之介著「白」より一部改変）

（注1） 印半纏…着物の一種。

（注2） 恍惚…うつとりすること。あるものに心をうばわれて、われを忘れる様子。



問一 ――線①「さもびっくりしたように、突然立ち止まってしまいました」とありますが、なぜ白はそうなってしまったのですか。説明しなさい。

問二 ――線②「白の耳の底にはいまだに黒の鳴き声が虻あぶのように唸うなっているのです」とありますが、どういうことを表していますか。次の中からもつともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 白に見捨てられたことに気づいた黒の叫びが、うらみの声として白におそいかかってきたということ。

イ 黒の助けを求める必死な声が、耳もとで飛ぶ虻のようにうるさくこびりついてはなれないということ。

ウ 白の命を惜しむ強い気持ちが、黒の鳴き声を虻のようなちっぽけな存在に変えてしまったということ。

エ 黒と過ごした最後の思い出が、いつまでも飛び続ける虻のようによみがえってきてしまうということ。

オ 白が夢中で逃げてきたため、途中で耳の中に虻が入ってしまったことに気がつかなかったということ。

問三 ――線③「お嬢さんも坊ちゃんもただ呆あっ気にとられたように、頭さえなではくれません」について答えなさい。

(1) 「呆気にとられたように」とはどのような意味ですか。次の中からもつともふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 傷ついてしまったように

イ 張り合いがないように

ウ 当たり散らしたように

エ 怖おじ気づいたように

オ 驚おどろきあきれたように

(2) お嬢さんも坊ちゃんもそうなのはなぜですか。その理由をわかりやすく説明しなさい。

問四 — 線④「白は急に背中の中の毛が逆立つように感じました」とありますが、それはどのような気持ちをあらわしていますか。次の中から最もふさわしいものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 飼い主に自分の体の色が黒いと言われたことへの驚き。

イ 自分の飼い主に気付いてもらえなかったことへの驚き。

ウ 信頼していた飼い主に認めてもらえなかったことへの悲しみ。

エ 黒が目の前で犬殺しに殺されてしまったことへの恐れ。

オ 自分の全身が黒に変化したことに気付いたことへの悲しみ。

問五 — 線⑤「あれ」とは何ですか。八字でぬき出して答えなさい。

問六 — 線⑥「きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！ きゃあん。きゃあん。助けてくれえ！」——線⑦「きゃあん。きゃあん。臆病ものになるな！ きゃあん。臆病ものになるな！」について答えなさい。

(1) — 線⑥はだれの言葉ですか。名前を答えなさい。

(2) — 線⑦は、実際に発せられた言葉ではありません。なぜ白はこのように聞こえたのですか。その理由を説明しなさい。

問七 — 線⑧「白は胸が一ぱいになりました」とありますが、なぜ白は「胸が一ぱいになったのですか。その理由としてもっともふさわしいものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 身体の色が変わってしまった自分を受け入れてくれる存在がいるのだと分かり、うれしくなったから。

イ 名前について触れられたことで、身体の色が変わったことへの絶望や悲しみを思い出したから。

ウ 主人の話題になったことで、身体の色が変わっただけで自分を捨てた飼い主へのうらみを感じたから。

エ 小さい子犬にまで、名前と身体の色が違うことをからかわれてしまい、悲しくなったから。

オ 温かい食事や家族の話聞いて、身体の色が真っ黒な自分の今後の暮らしに不安を覚えたから。

問八 — 線⑨「白はただ恍惚とこの犬の姿に見入りました」について答えなさい。

(1) 「恍惚と」するような、どのようなことが起こったのですか。

(2) なぜ(1)のようなことが起こったのですか。あなたの考えを答えなさい。

問九 この小説の説明として、ふさわしいものを二つ選び、記号で答えなさい。

ア 「御覧なさい」などと書き手が読者に直接語りかける言葉を多く使うことで、読者を物語に引き込む効果をもたらしている。

イ 「白」だと分かっていない二人の人間の会話をくりかえし描くことで、外見しか重要視しない人間のおろかさを表している。

ウ 「風のように」「鍋底のように」「鏡のように」とたとえの表現を使うことで、状況を明確にわかりやすく伝えている。

エ 全体を通して会話を多く用いることにより、「白」の感情の変化をわかりやすくし、読者に場面を想像しやすくしている。

オ 「白」が「月」に話しかけている場面では、「白」の長年の飼い主に対する愛情を表し、やっと飼い主に会える喜びを示している。

問十 この小説の作者である芥川龍之介の作品はどれですか。次の中から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 坊っちゃん    イ トロッコ    ウ 銀河鉄道の夜    エ 小僧の神様    オ しろばんば    カ 蜘蛛の糸

〔三〕

次の——線部について、カタカナは漢字に、漢字はひらがなに、それぞれ改めなさい。

- ① 算数の問題の解き方の定石を学ぶ。
- ② 難しい技術を会得する。
- ③ 新しいリヨウイキのことを学ぶ。
- ④ ゾウキバヤシには様々な生き物が生息する。
- ⑤ 薬局でよく効くイチヨウ薬を買う。
- ⑥ 赤ちゃんがやすやすとネムる。